

語りの触媒としての看護師

Nurse as a catalyst of narrative

村上 靖彦

●大阪大学

1. 声かけの倫理

看護における倫理と言葉の関係について考えてみる。ただし倫理とはいっても治療などの判断や意思決定の場面はここでは関心の外にある。その外側あるいは手前でおいて生じるより基本的な人間関係のレベルで生じる倫理がここでのテーマである。10年ほど看護師の聞き取りを続けるなかで、医療的な判断とは異なる水準での倫理意識が看護実践を駆動しているということに気づいてきた。そのなかにかくつかのトピックがあるのだが、ここではそのうち二つを取り上げたい。

まずは非常に素朴なことなのだがコミュニケーションをとろうとする努力、あるいはコミュニケーションが取れずに断絶してしまうことである。あまりにもあたりまえのことなので看過されがちだがここが出発点になるように感じている。看護師たちはコミュニケーションを取ることが難しい病や障害を持った人たちともコミュニケーションをとろうと努力することを、その倫理の根幹に置いている職種であるといってもよい。意識のない患者がたとえそのまま見取りに向かうとしても、看護師は声をかけ続けサインをキャッチしようとする。声をかけることという能動性と、サインをキャッチしようとする受容性の努力が看護師の実践を支えている場面に数多くであって来た。

逆に言うと、もしも看護師からコミュニケーションを断念する場合には、倫理的な問題が生じる。ある重度心身障害児を在宅で育てているお母さんのお話をうかがったときである。数年前から月に1回同じ病院(その地域の基幹的な小児病院)にレスパイト入院してきたのだが、次のように言われた。

「最近の看護師さんは、挨拶をしてくれないんです。隣のベッドにいる子どもの検温だけして挨拶もせずこちらを振り向きもせず足早にナースステーションに戻っていっちゃって…自分の受け持ちの子どもの処置だけして、ほかのベッドの子

もたちも見ないようにしています」

このようなコミュニケーションが絶たれた環境では、入院している子どもたちの尊厳が十分に配慮されているとは思にくい。実際レスパイト入院後には体調が悪くなることを覚悟している、と母親は語っていた。ここでもコミュニケーションの不足と体調の悪化が(医学的なエビデンスはともあれ)当事者にとっては結びつけられて感じられている。もちろんその背景には過重な業務を課せられている看護師側の事情もあるだろう。ここでもシステムがもたらすコミュニケーションの遮断があり、それに抗う仕方倫理が要請されている。声かけ(声なき声が発する)サインのキャッチによって患者は言葉の世界へとつなぎとめられ、決定的な孤立から守られる。

2. 語りの触媒

もう一つここで取り上げたい倫理は患者や家族が「運命」に直面する場面に立ち会い続ける努力である。多くの場合、死や障害は受け入れがたいものであり、たとえば若年での死の場合には、不条理さが際立つことも珍しくないだろう。以下は、小児がん病棟に勤務する看護師が死が近い子どもに付き添う母親と会話する場面である。

G: たとえば「このまま死んじゃうのかな」って言われたりとか。「もっと治療はないの?」とか、「何でこの子死ななきゃいけないんだろう?」とか、私もわかんない質問があるんですよ。

で、そういったのも答えられなくて。もうそういう話をしてもらえる存在なのかって、自分で、ま、自信がないっていうのもあるんですけど。そういう話をしてますね。何かこう、「これがフラットになっちゃうこととかあるの?」とか。モニターとか。何か、「どうやって最期なるのかな」とか、ときどき何か「先生こなくなっちゃったけ

どむかつく」とか、そういう話とかもだし。「今苦しいのかな」とか、「やっぱり死ぬのいやだな」とか。そういう。(村上 2013)

「何でこの子死ななきゃいけないんだろう？」という状況に母親は直面している。母親にとって子どもの病と死は意味づけることができない不条理であろう。そして母親が向き合っているそのような場面に看護師は立ち会い続ける (Gさんの語りには向き合うことができずに、宗教に走る母親やクレーマーとなる母親も登場する)。母親が独りで子どもの死に直面し続けることはとても困難であろう。ここでGさんは何かするわけではないがそこに居続ける。逆にともに居ることができなくなった主治医は「むかつく」と言われる。

看護師が担うこのような役割は無視することができない。ここでの看護師は何かをしているわけではないが、母親が受け入れがたい状況を言葉へと変換するための触媒となっている。もしも言葉とならなかつたら

この状況は単に受け止めることができない外傷になってしまう。患者や家族が語りを紡ぎだすための触媒となる看護師という役割そして倫理がここでは見えてくる。

そしてこの触媒は語りの触媒であるだけでなく、母親を子どもへとつなぎとめる触媒でもある。外傷的な状況は多くの場合、関係の切断が問題になる。看護師は母親の言葉を受け止めることで母親が子どもとのつながりを見いだすための蝶番となっている。

声かけとサインへの感受性によって患者を孤立から守る看護も、患者や家族の苦境に立ち会い続けることで語りの生成を支える看護も、看護師が言葉の生成を護ること、そのことが同時につながりを維持するという意味で倫理となる。

参 考

村上靖彦. 摘便とお花見. 東京: 医学書院; 2013.